

小伊呂物産
上

^ 13
2908
1



門 八 13
2908
卷 1

へ 13
2908
1-3

岳亭定岡作

青齋夏山画

忠義小存曾

ゆきりし里

版元 三林堂

昭和九年
七月六日
購求

人生平るのりんと欲まじとも嗜欲是を害す

淮南子乃詞實出富里爰み人乃好色男子

あり恩を報るみ死心を以て終み其身を斂

下み滅す亦二人乃幼童見女あり身を摧て

以忠を佐し後自大家を裁す嗚呼其患

苦筆紙を以盡がく唯感るみ余りとす是

往古針計乃更るるを今棒ふと書言は

周く世界を振廻す其當人更を願ふみこ

忠義小伊曾物語目録

○壹の巻

○涙み縁乃 切てゆく 両袖

○捨る身をも 捨りれど 墨水

○味く吐して 喰つろす 食客

○そこで奴が 骨を折 水汲

○貳の巻

○命乃親を 撫こまら 龍病

○法支の物ハ 虚でまい 本店

○能も巖乃 引つぐく 夜通

○癩が治つて 又おこる 急病

○おつみ狂言 書てえら 色悪

○参の巻

○胡蓋くさると 喚おとと 雪隠

○忠義小身をも 暗くまら 宵闇

○次血んご金をも 次血まれと 道中



小吉



加
奈

小山七



絃角而有新節
 嫩
 草雪の雨
 一
 鑿而在所操寒
 楸凍中蕾
 右出僮義好費 岳亭

忠義小伊曾物語一

岳亭定岡戲編

○泪小縁のさきとてゆく雨袖

善ぜんの忠ちゆうを作つくより大おほいなるなる一悪あくの不忠ふちゆう
 するするより大おほいなるなる一忠ちゆうするするより大おほいなるなる福縁ふく縁
 するする不忠ふちゆうするするより大おほいなるなる刑罰けいばつ加くわはるはるより大おほいなるなる一
 の書あきも見みえてくるくるより大おほいなるなる悪あくををまましてしても
 悪あくととおおののむむでで恩おんををううけてけてもも恩おんととままるるより大おほいなるなる

おこころらむ身みをくゞしてぞつうへなるやどふ田
平ひら夫う婦づもあましくよろこびぬらんこの伊い豆そ
をこが子の田た之助のすけめあをまじく〜まど女め夫うとの
閨ねやのむつごふ相あ俵はらせ〜こともあ〜〜とぞ志こころう
るふ田た平へいが一いつ子こ田た之助のすけハせい高たかく色いろ白しろくち〜
つよ〜
つよ〜
かつゆもあふ〜と二ふた親おやもこのめふう〜
このめ〜くおめひぬ〜と〜ふおめひぬやけ

田た之助のすけちうごうめつての外ほかの放はな蕩たうみるう
二ふた親おや不ふ孝かうみして高たかひをさ〜ひあ〜き友とも
とおどちう大おほ酒しゆみふけりあひひかけま〜と
金かね根ねを〜つひや〜夜よごと花はな街まちの〜あそびて
家いへみあることおれあれがよろ〜〜
ど悪あく〜〜
公こう人じんが〜
ぬ大おほ〜おど〜
ぬ大おほ〜おど〜
ぬ大おほ〜おど〜

まればどらりちましくあつつれどもとてもひとらで
まあるあどとそれうま親るい想まより合あひま大勢か
つて剛こいいけん手をつくとさあけれど豆ま腐
ふかまがひぬ糠ふ打くつんやとまをさるよ
もあどあひちう合のみなせんさくのちくのあさ
まことあんと親族中ふかまひてま〜田平もや
るなりま神ふいのりか仏ふねがひ何まとぞせがれ田之
助まが放ち持のやむやふと茶ちどちま塩まどちま煎まえ

してもこれも又らうううさうまま放ち蕩まあましく
つりあまうさこのごうけんの喧けん花けんをこのまこのみ
のま戯けん場けんで口けん偏けん〜まけんのけん花けん街けんで入けんふけん疾けんつけんけけんか
〜と〜のあづまけまみまらまそまうまのま出ま入まのままま其ま
平ま十ま兩ま二十ま兩ま舟ま宿まうまのまどまうまふまらまるま料ま理ま茶まや
うまかまさま出ま〜らまうま田ま平まも今まのまあまさまれまあまどまひま只
がまうませまんまと〜てわまらまうまるまあまるま日ま一ま族まのままままま
らまちまよまうまてまさまるまぐまと相ま讀まさまるまふまとまかまくまらまけん

も評定も太のまの説経馬の耳小風さんの
やくちもいへばそれごとこのおとこもいへば
まが親の首小縄をうづらひ定まらうよ
それとも実子のこととひらうらうらあふ
あともとも子也急の暗のせひもな〜ゆん
家おかつらともあ〜の先祖へ討して大き
不孝ひとまづ田え助を勘当して家名を
大切おさるふのまうぶらうとん勘当〜こととも

のち〜心をあ〜いあなづ又あるこれぬとらふあも
あ〜どどか〜家こそ大切それと諸親族ら
どうの凌合この一條おさるまうけれが田平丈
婦の実子のことか〜いおめ〜とも外ふるさ
ごいふ〜ともな〜い〜これお一変〜
やどなく代友孤〜らう〜とてまことこの勘当
とどらうおらう親のまげさお引〜て田え助
い〜い〜をさる〜らう〜身が〜一志んあ〜

ふぐさしをり取う〜おきおに仇異見いけんあきさう
あしでせし〜さるみか何なにを〜して身みひとしを
うぐ〜うぐの田いんを助るの〜むであれがとこ取う志しあ
るので大さ〜のてん天てんを家根やねと地ちを家
と〜一本いっぺん立たの大おほいだんだんさるされ〜ままぐぐお北あきたこく〜
どうどうややおんおんおひおひかかさんとと羽はををろろををかかここみみららと
おつおつももままげげてて結むすび〜まり尻しり先さきのおひ帯おびよよううちちががむ
こころこころのふ不ふ敵てきりりででゆゆくく田いんをを助たすああききささるる〜ひとひととぐ

みみとことなむる〜二ふた親おやみみぎぎふふ志しづづるる袖そでと
袖そでここれれ〜みみみろろううみみろろうう
○捨すて〜身みををもも拾ひろりりれれ〜墨すみ水みづ
竹田屋たけのやのと田いん平へいののひひととりり子このの田いんをを助たすをを勸かん通たう
〜〜ととももももももととがが親おや子このの恩おん愛あいああてて日ひごとごと
こことととと〜ひひひぬぬももみみくく〜ととと〜ととと〜ととと〜
ううろろぐぐかかくくててああらら〜とととももよようう〜かかか〜ととと〜ととと〜ととと〜
ららぬぬここぐぐ子このの不ふ孝かう今いまののああつつ〜おおおめめひひ切きべべ〜とと

因^ゆこころうのや^やん^んとら^と田平やが^がつれ^つら^ら
とものものふらひつけてそ^そ近^こ孤^こを^をう^う
松^{まつ}と^と瓶^{びん}お湯^ゆを^をら^られて^て買^かよ^よせ^せこれ^をの^のあ^あせ^せ
うれ^れが^がう^うの^の男^{おとこ}その^{その}湯^ゆを^をひ^ひと^との^のま^まめ^めち^ちを^を
二^にッ^ッ二^にッ^ッ答^{こた}て^てや^やう^うく^くお^お起^およ^よう^うSw^{sw}い^いべ^べな^な
る^る声^{こゑ}あ^あて^てや^やう^うの^のあ^あら^らい^いけ^けあ^あて^てま^まま^まま^まま^まま^まま^ま
ご^ごち^ちお^おら^らう^うひ^ひど^ども^もら^らう^うく^くあ^あり^り行^いこ^こう^うら^ら
が^がこ^こ今^こ宵^よの^のこ^こお^お野^の宿^{しゆく}の^のこ^こや^やど^ど日^ひも

くれ^れひ^ひを^をま^まや^やく^くは^はか^かの^の拵^{あて}が^がさ^さま^まべ^べこ^こ
く^くら^らこれ^をを^をう^うら^らい^いま^まあ^あら^らい^いけ^け餅^{もち}あ^あて^て
今^こ宵^よ一^ひ夜^よの^の食^まと^とら^らい^いま^まら^らう^うけ^けら^らの^の
ち^ちら^らま^まご^ごん^ん万^ま一^{いち}今^こ一^ひ度^ど入^いる^るの^のあ^あの^のま^まご^ごう^うを^をら^ら
ま^まや^やら^らお^おら^らう^うひ^ひら^らう^うら^らい^いの^のは^はれ^れお^おら^らま^まよ^よら^ら
こ^こら^らや^やど^どま^まら^らう^う多^た分^{ぶん}の^のこ^こよ^よひ^ひ一^{いち}夜^よの^の食^ま
ま^まら^らう^うSw^{sw}あ^あら^らい^いSw^{sw}あ^あら^らい^いの^のま^まご^ごう^う
涙^{なみだ}を^をら^らい^いま^まら^らう^うの^のま^まご^ごう^うの^のま^まご^ごう^うの^のま^まご^ごう^う



あられおおもひそのおとろいなるまご姿あてこの川
端かたの夜風よをふふれつゆみぬれて夜よをあうさを
今いま音ねひと夜よのこもらぐこころん何なにあふらあれ
いづろの素性まごぢやうの人うきつれども見みるがぶるやど
あまのあられおひをこよひの拙者せうぢやが家やみとも
るひえの音ね痛いたいこころび本服ほんがくのこせ申まう
まごころこも今いまもこころ待まちむよとわもこと
もの男おとこ小こ轉かぎしてうやむひさしれとらひつけてま

かゝるさても供たねのをとこころんまぢやみとこころ
行ゆくがは時ときむうしきだてかごしてうやとひひ
まごころされぐ田平たへいよろこびやごうのうま飢うまる男
まごころけのせその身みもまもやうしそひて家や格が
まごころてまごかへうらる
○味あじく咄うたと喰くつらまを食た客かく
田平たへいかの飢うまる男おとこを轉かぎ子のせこが家やみとも
るひえのあまの影かげのうらみられおとあへう

小夜具やぐるどち先あ醫師いしや師しをこの業わざをこのま
せうもるどこら入いてくをせ夜よとさ伊い多とと
丁ちやう稚ちの小こ吉きちと二人ふにんをつけおさめ抱かかせされば
次つぎの日とさこらようくらいしの日とさこらいし
ざらせば田でん平へいをあらわくようくすなからいし
めのこもしたせ業く後どのあられば田でん五ご日にち過と
て起出い十じゆ日にちをうくらいし死しなればめのこもしくらいし
おくらい田でん平へいの男をこらいし年のこらい廿に七しち八はち日にち

高たかくくときろく眼めの口めとやいへて眉まゆ
黒くろく鼻をさらしくくとあらわくとやいがいるさい義
男おとこあらわくあらわく男おとこがまどど身みを投
んとさくくとあらわくく何なにもなくく
意味いみあらわくとあらわくくとあらわくく日ひの男かか
むむとあらわくく身みの何をなの産まりてくらいしのあらわく
飢うえのこも死しんとあらわくとあらわくくとあらわくく身みよよ
りの人ひともなくくとあらわくくとあらわくくの男かかいて

かひてまはるるどめせりおやがといのまあいの
 歡くわんハとカめのいれもよろしくなこあいく
 逐ちく電でん一今いのまづこも身みをよまごしるあいな
 く浪なみ花はなのおとものいちご年ねんのいせんい相あをて今
 のた人ひとのよ世よといふしれが尋たづねめくともこれ
 とうあいづるめのあるあいづそのいちご路ぢのい路ろ合ごう
 もあいづれのいちごもあいづといやせん
 かくやと葉あのいちごもあいづといやせん
 瘧あせうのいちごもあいづといやせん

色い之し一いくいづいひい世せ俗ぞくのいちごもあいづといやせん
 人ひとのいちごもあいづといやせん
 ろうといふしれが尋たづねめくともこれ
 もあいづれのいちごもあいづといやせん
 出いていちごもあいづといやせん
 病やまひさらすいちごもあいづといやせん
 一いちごもあいづといやせん
 今いのよ世よのいちごもあいづといやせん
 着きるいちごもあいづといやせん

食くひ小こ菴さむ龜かめををつつののままああいいれれどどももここれれととて
もも長ながくくももああれれどど今いまのの一ひとめめんんままくくのの丸まるををごごうう
何なんととささぶぶららいいふふごごててももるるくく病やまひへへああままととくくああめめくく
ままうう一ひと刻ときももささややくく死し々々くるるりり者やどををああははしし出でしし其その
日ひよようう身みををささるるげげんんととののああめめいいどどももささかかくくああ思おも
ひひごごううううひひてて一ひと夜よ二ふた夜よとと野の宿やどへへてて四よ五ごああちち
喰くひひごごふふををささううややううくくののここふふててああままごご川がはののふふと
ままああでで虫むしののままふふごごくくふふごごううつつとと身みをを投なげげんん

ととししここりりををととおおららるるああままいいままけけらられれ今こん日にち只ただ
のの病やまひももららぬぬ身みももささここややふふりりひひああままととふふ
ははまま婦ふささぬぬののはは厚あつ子こ思おもふふよようう高たかくく海うみよようう
ふふうう一ひと生ま々々世よ々々ここははととれれぐぐととくくひひとと泪なみだををごごうう
みみののののごごららるるおおごご田でん平へいふふうう好このままををささるるああままいいんん
ささううまま代しろああららららるるああままででささててもも病やまひ命いのちのの人ひとううらら
ととああままいいああぬぬ人ひとももららぬぬううううううううととささてて又また名なのの何なにとと
ららああごごととととをを男おとこととささしてしてかかのの苦くるしみををああつつととああ

まをひかせつ主人だん後ごのめんどのこのやうな事ことは
りりおて主人の名なの一字いちじを下くだされ後ご作さくと名
のちやあつとこころあぢいそれより通とほる町まちへ
人をつら〜苦くるむとらふ家いへのあつ〜狐この近きん
隣りんめていびつひせせくれづるやど苦くるむの
つづれざるやまふ丁ぢやう稚ちのころより久ひさくつと
め〜男おとこめて後ご作さくとらふものあつ〜がこと
ふ実じつ辨べんるものころ〜とこころあぢい

はひらあ〜からぬ人ひとのつとをいめてい〜らうお
ちつと田でん平へいをさ〜か家いへ内うち中ちゆうころをとおく
ものさらあふ〜後ご作さくこれよりやまふ人ひとと
もつとむ食くわ客かくともつとむこの竹たけ田でんをふぞ
居い〜らうらう
○そこで奴やつこが骨ほねを折をる水みづ汲ぎ
切きも後ご作さくこの竹たけ田でんを〜おさうらうらう
せんの身みとらう〜且あ〜をやく起お出し門もんの戸と

をあげ家のまへのさうぢをさのむじん
をうけ下男の手つてひをくそれより臺
取入さうて釜の下を焚火水をくさあひ
ものなどして下女の手をくさひ田平夫
婦おさづれり洞ごうひお湯をとうてし
手あつひをさづれづあつ湯をよしてそこ
らふささうぢーあうぬ指おささづれづやが
てさうぢー喰をさづれづ梳をあひひきの

間おの店の高ひをてつてひくるがわさこふ
あさるひ上おかてえくしあひるのめよう
もくちあふよく又あさるほどのあをぬとさひ
等盤とつてむちくとやうさこそその等術
の遊者みことおのりあふ人かあつとさこ
徳文くせてさづれづ手跡のえごさつ支草の
ぬけあふさひなうく番取などのおよぶさう
みあつむでつちるほど病き手のさひよく看

行ゆきどごきこきればま妻つとむ婦ひのとよう家うち内ぢぢう
のひと々ごこの淡作るくひふいせんとおののふ
不どあごどるうみ々う

忠ちゆう義ぎ小こ伊い曾そ物もの語ご一いち後ご

梅うめん

ささんさんさ

